

新教科「メディア・コミュニケーション科」を創る ～小学校課程における情報教育カリキュラムの開発と実践～

京都教育大学附属桃山小学校 研究主任 教諭 山川 拓

1. 情報社会を生きる子どもたち

変化の激しい情報社会の中で、氾濫する情報の中を我々は生きていかななくてはならない。これには大人も子どもも関係なく、「子どもだから許される」「大人の目があるから大丈夫」では通用しない時代になってきている。それゆえ、これからの情報社会を生きる子どもたちにとって、学習指導要領の謳う「知・徳・体のバランスのとれた力」や「思考力・判断力・表現力」が情報やメディアの分野においても十分に培われなければならない。

学習指導要領（平成20年改定）総則において、

各教科等の指導に当たっては、児童がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段に慣れ親しみ、コンピュータで文字を入力するなどの基本的な操作や情報モラルを身に付け、適切に活用できるようにするための学習活動を充実するとともに、これらの情報手段に加え視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること。

と各教科での情報機器の活用やモラル・マナーの育成のための学習活動の充実、視聴覚教材などの教材・教具の活用が明記されている。この項目を足場として、各教科・領域でそれぞれに情報に関わる活動が行われてきている。しかし、実際は、情報やメディアに関する体系的なカリキュラムが存在せず、各担任の技量や学校の設備によるところが大きいのが現状である。

今日における社会の急速な情報化や、氾濫する情報やそれを取り扱う機器と子どもが接する機会が増えてきた点を鑑みると、情報機器の操作や情報モラルなどの学習をする場を十分に保障するとともに、教育課程上における道徳と道徳教育の関

係と同様、日々の情報活用を「補充・深化・統合」するための系統立った「情報に関する学び」を構築し、実践していくことが必要だと考えられる。そのため、各教科でのICT機器の利活用を充実させるだけではなく、「情報をどのように扱うか」「情報を通してどのように考えるか」といった、「情報教育」そのものに目を向けるとともに、情報を中核とした「新教科」の開発が必要であると判断し、新教科開発のための教育課程の編成および学習プログラムの開発を行った。

2. 21世紀型情報活用能力

情報教育の目標は「情報活用能力」とされている。情報活用能力を育むためには、情報の取り扱いやメディアの特性を理解するとどまらず、相手とのコミュニケーションを前提とした情報の適切な活用が必要となる。つまり、知識基盤社会に生きる子どもたちにとって求められる力というのは、情報機器操作の能力の育成にとどまるものではなく、メディアを通した先にいる「人」のことをどれだけ意識し、メディアを読み解いたり、メディアを活用して発信したりできるかという力である。加えて、主体的に収集した情報を批判的に読み解き、それをもとに自らの考えを整理・構築して発信したり、コミュニケーション活動を通して互いの意見を交流する中で、自らの考えを深めたり改めたりしていく力が求められるのである。

この情報活用能力が定義されて16年の歳月が経った。急速に情報化が進む今日において、子どもたちが身に付けるべき情報活用能力の定義は、当然ながら再検討されるべきものである。

そこで、未来を生きる子どもたちにとって、情

報社会を生きるために必要な力とは何かを捉え、子どもたちが情報と向き合う時、どのような構えで学習に向かい、どのような能力を身に付けていく必要があるのかに着目し、「21世紀型情報活用能力」を以下の5点で再定義することとした。

- ① 相手の存在を意識し、その立場や状況を考える力（『メディアを通して相手を意識する力』）
- ② メディアの持つ特性を理解し、必要に応じて得られた情報を取捨選択する力（『メディアを選ぶ力』）
- ③ 批判的に情報を読み解き、論理的に思考する力（『メディアを通して批判的に思考する力』）
- ④ 情報を整理し、目的に応じて正しくメディアを活用していく力（『目的に合わせてメディアを活用する力』）
- ⑤ 情報が社会に与える影響を理解し、責任を持って適切な発信表現ができる力（『メディアを活用する際に責任をもって発信する力』）

また、この5点は同時に、「子どもに育てたい力」として研究の柱とし、21世紀型情報活用能力を体系的に育てていくための新教科「メディア・コミュニケーション科」の開発と実践を行った。

3. メディアとコミュニケーションの関係

「メディア」とは「人と人とをつなぐ媒体」である。メディア・コミュニケーション科における「メディア」とは主としてコミュニケーションを図るために必要とされる道具や機器のことを指している。情報化社会の進む今日において、「メディア」なしにコミュニケーションを語ることはできず、反対に、コミュニケーションを円滑に行うためには、自らの考えをわかりやすく伝えるために適切な「メディア」を活用していく力が求められる。そのため、「メディア」と「コミュニケーション」は一体的なものであり、不分離のものであると捉えて、研究を進めている。

また、メディア・コミュニケーション科の主たるねらいに「相手意識」がある。情報の受信・発信の際に、メディアを通じた「人」を常に意識して思考し、判断し、表現していくことが「コミュニケーション」において重要であると考えている。そして、ただ自らの考えを一方向的に発信して終わるのではなく、互いに考えを伝え合い、自らの考

えを再構成しながら議論を深め、課題解決に導いていく力をつけたいと願い、以下のようにメディア・コミュニケーション科の目標を設定した。

【メディア・コミュニケーション科の目標】
社会生活の中から生まれる疑問や課題に対し、メディアの特性を理解したうえで情報を収集し、批判的に読み解き、整理しながら自らの考えを構築し、相手を意識しながら発信できる能力と、考えを伝えあい・深めあおうとする態度を育てる。

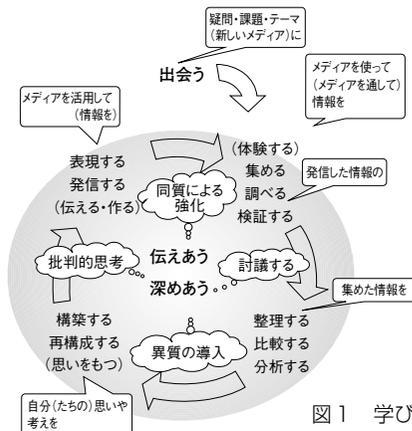


図1 学びのイメージ

4. 教科における子どもの学びの姿

図1は、これらの考えをもとに、メディア・コミュニケーション科における子どもとメディアの出会いや学びの流れをイメージ化したものである。

疑問や課題と出会い、自らすすんで情報を集め、比較・整理・分析をしながら自らの考えを構築し、メディアを活用しながら発信・表現し、議論を通してさらに考えを深めていく。この一連の活動の中で、メディアを効果的に活用し、相手の考えを共感的に理解しながら、自らの考えを深め、発信していける子どもの姿をこの教科を通して探っていきたいと考えている。これらの一連の学びを子どもの持つ疑問や課題から始めるようにしているのは、わたしたちの理念でもある「子どもの側から教育を発想する」ことを、この新教科にも求めているからである。

5. 実際の授業から

この学びの事例について、平成24年度の実践を紹介する。

(1) 実践学年 第2学年 (72名)

(2) 単元 効果音を使って場面の様子を伝えよう

(3) 単元のねらい

- ・身の回りの効果音に関心を持ち、場面の様子を思い浮かべることを楽しんだり、相手に場面の様子が伝わるように音を選んでお話を作ったりしようとする。
- ・効果音を用いて場面の様子を伝えるために、効果音の良さや面白さを捉え、相手にその特長を生かして伝えるようにする。
- ・効果音の使い方や使う良さを知り、場面の様子に合わせて使い、使い方によって相手の感じ取り方が変わること気づく。

(4) 実践の流れと子どもの学び

第1次は、音を聞いて想像したことを交流することを通して、音は様々なイメージをもたらすことを学んだ。はじめに、10分間流れ続ける雨の効果音を聞いて、イメージしたものを絵に表した。次に、雨の効果音に強弱をつけることで、イメージがどのように変わっていくのかを考えた。雨の効果音をだんだん大きくしていくことによって、小雨から大雨へとイメージが変化していった。さらに、最後に雨の音に鳥の鳴き声を加えることによって、空が晴れていくイメージを持つ子が多かった。イメージの変化を交流することで、「音がちょっと変わることで、イメージも変わっていった。」と、音が変化することによってイメージもまた変化していくことに気づくことができた。

第2次では、雨の効果音を用いて、お話の「はじめ」「なか」「おわり」のそれぞれの場面を考え、効果



音を組み合わせる場面を表した。場面の様子を伝えるために、音の強弱をつけることでイメージが変化していくという効果音の特長を生かすために「はじめ」「なか」は、雨の効果音だけで表現するようにした。また、新たな音が加わることによってさらにイメージが広がっていくという効果音の

特長を生かして「おわり」の場面には他の効果音を加えるようにした。子どもたちは一つ一つの音を聞きながら、「おまつりの場面にしようかな」「だんだん晴れていく様子にしようかな」など、いろいろ試しながら相談して使う音を選び、PCやスピーカーを操作して作品を作っていた。



第3次では、作った作品を交流した。同じ音声素材であっても、雨の効果音をだんだん大きくしていく、

あるいはだんだん小さくしていくというように、そこに意図を加えることで受け手の感じ取り方は変わってくる。作品を作っていく過程で、子どもたちは意図を持って一つ一つの場面を表現した。音として表現された作品の交流から、効果音の使い方によって相手の感じ取り方が変わること気づくことができた。

(5) 成果と課題

本単元を通して、子どもたちは効果音の特長や、効果音が果たす役割について考えることができた。また、PCやスピーカーを操作しながら効果音を作っていく活動を、子どもたちはとても楽しみ、友だちと話し合いながら自分たちの意図を持って場面を作ることができたと考える。一方、作品交流の後、もう一度自分たちの作品を振り返って録音し直すことなどをすると、より自分たちの伝えたいことははっきりするであろうと考える。

6. 教育実践研究発表会について

新教科の開発研究をはじめ、今年で3年目を迎える。研究のまとめとして、今までの実践の成果をふまえた教育実践研究発表会を、平成26年2月21日(金)に予定している。当日は全学級の公開授業とともにシンポジウムを予定しており、参会者の方とともに、これからの情報教育の在り方について検討していく場としていきたい。

* 京都教育大学附属桃山小学校Webサイト

<http://www.kyokyo-u.ac.jp/MOMOSYO/>